

統合失調症者の家族の負担感 —感情表出、障害認識および能力障害が及ぼす影響—

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
障害・行動分析クラスター

長期にわたり慢性経過を辿る統合失調症は、本人のみならず、家族にも多大な負担をもたらす。家族は本人を支える存在として期待される一方、自らも障害受容過程にあるなかで本人の病理や社会的圧力に翻弄されており、固有の負担感 (burden) を抱えている。患者の社会復帰過程では、専門家による本人への働きかけとともに、家族による本人への支援が不可欠であることから、精神障害者の家族が抱える負担感を軽減するための援助技法を発展させる必要がある。

本邦では、精神障害者を抱える家族を支援する主要な場として家族教室が活用されてきた。そこで実施されている統合失調症者の家族の心理教育では、家族の感情表出の改善と障害理解の促進がねらいとして含まれている。しかし、家族の感情表出の改善および障害理解の促進が、家族の負担感に及ぼす影響は未だ明らかにされてはいない。そこで、家族の負担感に対する感情表出、障害認識および人口動態的・疾病関連背景の関連性を検討した。

対象は、退院準備中の統合失調症入院者の家族 24 名である。対象とされた家族の負担感を生活困難度尺度により評価した。次いで、感情表出評価のための Family Questionnaire を実施し、また、障害認識の評価のために、面接によって障害理解の程度を判定した。さらに、患者背景、罹病期間、日常生活能力障害、続柄、同居および家族教室参加回数を調べた。

分析では、はじめに、家族の感情表出、障害理解の程度および本人・家族の人口動態性・疾病関連性背景の個々の調査項目について、Pearson 積率相関係数の算出、または、一元配置分散分析により家族の生活困難度との 2 要因間の関連性を検討した。次いで、家族の負担感に対する家族の感情表出、障害理解および本人・家族の背景要因の関与の大きさを比較する目的で数量化理論 I 類による分析を行った。従属変数として家族の生活困難度を投入し、独立変数には感情表出、障害理解の程度および調査対象となった本人・家族の人口動態性・疾病関連性背景項目に関する原データについて、個々のカテゴリーの標本数が全体の 2 割を超えるようにカテゴリー化したデータを投入した。

結果のうち、はじめに、生活困難度と他項目の 2 要因間の関連性を検討したところ、いずれの項目とも有意な関連は見出されなかった。しかし、次の項目で各層の生活困難度得点にばらつきが見られた。感情表出では、批判的コメントを有する群の生活困難度がやや高かった。続柄では、父・同胞層の生活困難度の平均値が高く、一方、母層ではこれを下回っていた。次いで、生活困難度を従属変数とし、カテゴリー化した他要因を独立変数として数量化理論 I 類により分析したところ、続柄、感情表出、能力障害の偏相関係数が 0.3 を越えており、また、全要因との重相関係数が 0.5 を示した。

本研究の限界と先行研究を踏まえつつ、今回得られた主要な知見をまとめると、家族の負担感は、①続柄と関連しており、特に母の困難性が相対的に低く認識されること、②感情表出と正の関連を示すこと、および、③本人の日常生活能力障害と関連するが感情表出や続柄による交絡の影響を受ける可能性のあることが示唆された。

臨床的には、家族教育において感情表出へ介入することにより家族の負担感が軽減される可能性を支持する結果であったこと、また、本邦の家族教育では、生活障害を性格と区別して病気の帰結と理解する立場が重視されるが、これに終始した説明のみでは家族の負

担感を変化させることに結びつかない可能性を指摘できる。